

ブレイクの名詩再読

— 「賛歌：イエルサレム」、「神聖なる姿」、「無垢の予兆」、「メアリ」

安 藤 潔

要 旨：

1970年代にウィリアム・ブレイクに接して英詩に憧れ、以来四十数年ずっとワーズワスやブレイク、コールリッジなどの研究を続けてきた。この流れで学位まで取得したのが15年余り前。英国ロマン派の専門家の公募に応じ、当時の本拠地を遠く離れて本学に赴任したのが12年前であった。しかしながら時代の流れか、その後学生たちには十分薫化もできずに、最近では英語の詩を講ずる機会も失われつつある。

8年前に長年本学にて活躍された同学科教授のご退職に伴う記念号に、人口に膾炙した有名な英詩を改めて解釈して論じるという論文を書いた。今回もお世話になった先生方のご退職に伴い、私の真に本分とすべきであった分野から、ブレイクの数編の有名な英詩の解釈を行い、もって先生方に捧げたい。扱った詩は『ミルトン』より、「賛歌：イエルサレム」、『無心の歌、経験の歌』の「神聖なる姿」、「ピカリング草稿詩集」より「無垢の予兆」と「メアリ」とする。

キーワード：

ウィリアム・ブレイク、「賛歌：イエルサレム」、「神聖なる姿」、
「無垢の予兆」、「メアリ」

I 精神の戦い

ブレイクの詩の魅力のひとつは、そのパワー、力強さにある。20世紀前半から中頃最も論じられた「虎」“The Tyger^{sic}”は『無心の歌』(Songs of Innocence)の「子羊」“The Lamb”の対極にあり、「経験界」の生き物の獍猛なまでも荒々しい生命力を描いているが、その力強さは英詩の中でも特に際立っているといえよう。また、同じく「経験界」に属する有名な

“London”については以前詳述したが¹、同時代の政治や社会の状況に対する怒りが表明されている点で、やはりパワフルな叫びとなっている。

ブレイクの力強い作品といえば、2012年のロンドンオリンピックでも開会式で国歌“God Save the Queen”に次いで幼い男の子が独唱した「賛歌：イエルサレム」(“Jerusalem: Hymn”)も詩としては実に力強い。そのために第一次世界大戦当時に曲がつけられ、特にイングランドの第二の国歌扱いされるようになったという。当時の国民の戦意高揚のために作曲されたのだが、その実、詩自体は戦争とは全く関係がない。ブレイクが自らの精神的な闘争を宣言した詩で、大作『イエルサレム』(*Jerusalem*)ならぬ、彼が1804年から7年がかりで創ったとみられる後期預言書『ミルトン』(*Milton*)の「序文」(“Preface”)に組み入れられた詩である。なおこの序文は版によっては省かれているが、以下に組み入れた画像はブレイク・アーカイヴに収められた二種で、ともに1811年の作とみられる。この中の聖歌「イエルサレム」の部分の転写を以下に提示する：

And did those feet in ancient time,
Walk upon Englands mountains green:
And was the holy Lamb of God,
On Englands pleasant pastures seen!

And did the Countenance Divine,
Shine forth upon our clouded hills?
And was Jerusalem builded here,
Among these dark Satanic Mills?

Bring me my Bow of burning gold:
Bring me my Arrows of desire:
Bring me my Spear: O clouds unfold!
Bring me my Chariot of fire!

1 拙著「「子供は大人の父」か—イギリス・ロマン派の名詩を再読する」『関東学院大学文学部紀要』第117号2009年12月25日、93-113.

I will not cease from Mental Fight,
Nor shall my Sword sleep in my hand:
Till we have built Jerusalem,
In Englands green & pleasant Land.

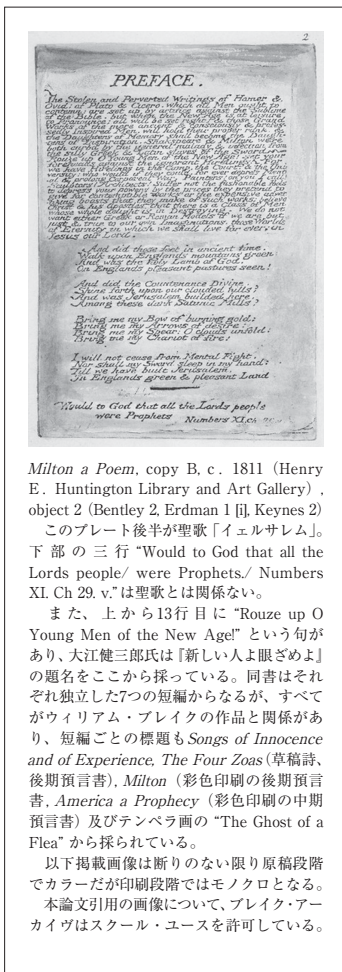
(以下ブレイクのテキスト・綴りは Blake Archive の Erdman: *Poetry and Prose* による。同書は銅版に残った原綴り採用のため句読法・スペリングは正書法とは異なる。) ²

以下論者訳を添付する：

そして古代にあの足は
イングランドの緑の山々を歩いたのか、
そして神聖な神の子羊は
イングランドの心地よき草原に見られたのか。

そして神聖なるかんばせは
わが雲のかかった丘陵に光を投げかけたのか、
そしてイェルサレムはここにうち立てられたのか、
これら暗い悪魔的な工場の間。

われに^{もたら}齎せ、燃える黄金のわが弓を、
われに齎せ、欲望のわが矢を、
われに齎せ、わが槍を、おお、雲よ開け、
われに齎せ、炎のわが戦車を。



Milton a Poem, copy B, c. 1811 (Henry E. Huntington Library and Art Gallery), object 2 (Bentley 2, Erdman 1 [i], Keynes 2)
このプレート後半が聖歌「イェルサレム」。下部の三行“Would to God that all the Lords people/ were Prophets./ Numbers XI. Ch 29. v.”は聖歌とは関係ない。

また、上から13行目に“Rouze up O Young Men of the New Age!”という句があり、大江健三郎氏は「新しい人よ眼ざめよ」の題名をここから採っている。同書はそれぞれ独立した7つの短編からなるが、すべてがウィリアム・ブレイクの作品と関係があり、短編ごとの標題も *Songs of Innocence and of Experience*, *The Four Zoas* (草稿詩、後期預言書), *Milton* (彩色印刷の後期預言書), *America a Prophecy* (彩色印刷の中期預言書) 及びテンペラ画の“The Ghost of a Flea”から採られている。

以下掲載画像は断りのない限り原稿段階でカラーだが印刷段階ではモノクロとなる。

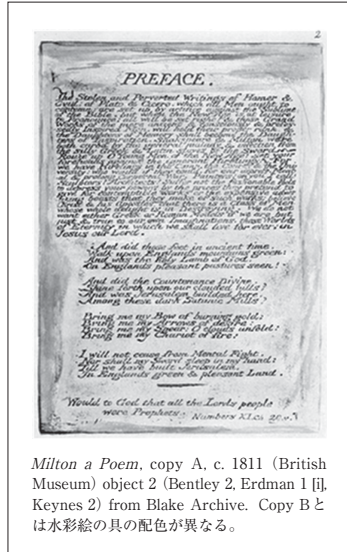
本論文引用の画像について、ブレイク・アーカイブはスクール・ユースを許可している。

2 David Erdman (ed.) *The Complete Poetry and Prose of William Blake* rvd. ed. (New York &c: Anchor, 1982 & c), 95-6.

われは精神の戦いを断じてやめぬ。
 また、わが剣を手の中で眠らすこともしない。
 われらがイェルサレムをうちたてるまでは、
 イングランドの緑の心地よき地に。

ブレイクは極貧の中無名のまま1827年にひっそり亡くなるが、発掘されるのは30年以上後の1860年代、ロッセティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-82) からラファエル前派 (Pre-Raphaelite Brotherhood) の、詩も書いた画家たちのグループが注目して後である。それ以降先ず彼の詩が広く読まれ、詩人のイエイツや、有名な経済学者ジョン・メイナード・ケインズの弟で外科医でもあったサー・ジェフリー・ケインズ (Sir Geoffrey Keynes, 1887-1982) らによって彼の詩集が編纂されていった。彼の銅板と水彩絵の具による彩色印刷や素描その他のグラフィックな面を含んだ複合芸術としての研究が進むのは20世紀半ば以降だが、第一次世界大戦のころまでにはすでに後期預言書もよく読まれていたようである。

そんな中でこの“*And did those feet*”の詩が注目され、大戦のさなかの1916年にサー・チャールズ・ヒューバート・パリー (Sir Charles Hubert Parry, 1848~1918) が曲をつけ、オルガン伴奏による合唱曲となり当時の国民の戦意高揚が図られた。それ以来この詩はイングランドの国民の愛国心をかきたてる聖歌となり、オーケストラ伴奏版も出て、様々な場面で歌われている。英国は20世紀の両大戦とも戦勝国となり、21世紀の現代でもこの詩が歌われる状況は同じである。しかしよく知られた第一次世界大戦の戦争詩や、英国の至る所にある戦没者顕彰碑を見るにつけ、いかに犠牲が多かったことか偲ばれる。しかしながら英国民がこの曲や国歌“*God Save the Queen*”をプロムスなどで何のわだかまりもなく誇らしげに歌うのを見るとうらやましくなる。父祖のことながら一度だけ世界のほとんどを敵にした無謀な世界大戦に敗戦し、いまだに一部周辺国から当時の侵略を非難される国民の国歌や国旗に対するわだかまりは彼らには理解できまい。



Milton a Poem, copy A, c. 1811 (British Museum) object 2 (Bentley 2, Erdman 1 [J], Keynes 2) from Blake Archive. Copy Bとは水彩絵の具の配色が異なる。

この詩の聖歌としての演奏はわが国内では1990年頃の学会で英国人研究者によって紹介されたと記憶している。インターネット時代になって当初拙い合唱の録音が出まわっていたが、2012年あたりからYouTube等への登録も増え、現代では“Blake”を名乗る男性ヴォーカルグループのかなりの歌唱を聴くこともできる。³

実はブレイクの詩“*And did those feet . . .*”を愛国的な聖歌とするのは、かなりの曲解と言わざるを得ない。解釈を通じその事実を指摘したい。クォトレイン（4行連）四つからなるこの詩は前半2連8行と後半2連8行に分かれる。前半は磔で亡くなった後のイエスの遺体を引き取ったと福音書に書かれているアリマタヤのヨゼフが、イエスの幼い頃にとともにブリテン島のコーンウォールにやってきて、錫の採掘や精錬の方法を教えたとの中世の伝説に基づいている。しかし当然ながらイエスの幼かった当時のブリテン島はローマの属領になる前のケルト人の住む島で、「イングランド」は存在しない。このことはブレイクも知っていたと思われ、この8行はすべて疑問文である。ブレイクは十代の頃からミケランジェロの描いたアリマタヤのヨゼフ像を模写して銅版画にする習作を作っている。後に彼は以下に添付した彩色印刷の「ブリテンの住民に説教するアリマタヤのヨゼフ」も作ったが、アリマタヤのヨゼフはともかく、イエス来英伝説までブレイクの当時広く英国で信じられていたようである。さらにそれがスコットラ

ンドにまで及んでいた中世の聖杯伝説とも結びつくことは、仏教の仏舎利に纏^{まつ}わる伝説に似たものを連想させられる。

ブレイクは、産業革命途上の当時、身の周りに工場が立ち並び始めた様子に悪魔的なものを感じ、このような祖国に、かつてイエスが訪れ、この地を神聖な場所としたのかと問いかけている。「緑の山々」、「心地よき草原」、「雲のかかった丘陵」と表現される、現代でも残る美しい英国



From *A Large Book of Designs*, object 6 (Bentley 85.6, Butlin 262.6) "Joseph of Arimathea Preaching to the Inhabitants of Britain" Composition & Print Date: 1796

ブレイクはこのようにアリマタヤのヨゼフがブリトン人に説教した様子を図像のテーマに選んでいる。

3 「ブレイク」の歌唱：<https://www.youtube.com/watch?v=C79L3vjKAWQ>

の風景に、こここそ嘗て神聖な理想郷イエルサレムがうちたてられた地なのではないかと想像しても不思議ではない。しかしブレイクはイエスの来英伝説には半信半疑というより、かなり疑った結果の疑問文表現といえよう。

従ってブレイクは後半8行で、「イングランドの緑の心地よき地」に理想郷たるイエルサレムをうちたてるまで、自分は「精神の戦い」を断じてやめないと宣言する。彼の精神の戦いに用いる武器は「弓」であり、「矢」そして「戦車」である。戦車といっても第一次世界大戦以降登場したtankとかcombat carなどではなく、chariotで、古代ローマ以前の武器と連想される。当然ながら精神の戦いだから、武器も比喩的なもので、人を殺す武器ではないといえよう。炎の戦車に乗り、黄金の弓に欲望の矢をつがえる姿にはヴィジョンの世界での戦士が連想される。「欲望の矢」だけ取り出すと性的な連想もある。いずれにせよ平和な理想郷を建設するには、困難な闘争を経なければならぬ。要するにこの聖歌は実際の戦争を鼓舞するものではなく、「精神の戦い」を貫徹する決意を述べたものといえよう。

最後に一言添えるなら、この詩にもブレイクらしい破格が見られる。Buildの過去、過去分詞はbuiltと中学生でも知っているが、この詩ではhave builtとwas buildedが混在している。この点もいかにもブレイクらしいが、現代に至りそのまま愛唱されている。

II ブレイクのミニマムに見る宗教多元主義の源

『無心の歌、経験の歌』(*Songs of Innocence and of Experience*)の、「経験の歌」に属する“The Divine Image”という小品がある：

The Divine Image.

To Mercy Pity Peace and Love,
All pray in their distress;
And to these virtues of delight
Return their thankfulness,

For Mercy Pity Peace and Love,

Is God our father dear:
And Mercy Pity Peace and Love,
Is Man his child and care.

For Mercy has a human heart
Pity, a human face:
And Love, the human form divine.
And Peace, the human dress.

Then every man of every clime,
That prays in his distress,
Prays to the human form divine
Love Mercy Pity Peace.

And all must love the human form.
In heathen, turk or jew,
Where Mercy, Love & Pity dwell,
There God is dwelling too.

神聖なる姿

慈悲、憐れみ、平和と愛に対して
みんながそれぞれの苦悩の内に祈る。
そしてこれら喜びの美德に対し
感謝の思いをお返しする。

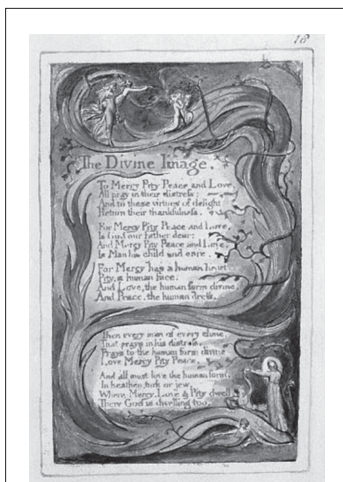
なぜなら、慈悲、憐れみ、平和と愛は
我らの愛しき父なる神だから。
そしてまた、慈悲、憐れみ、平和と愛は
彼の子たる人で、気懸りである。

なぜなら慈悲は人間の心を持ち、
憐れみは人間の顔を持つから。



Songs of Innocence and of Experience,
Copy C, 1789, 1794 (Library of Congress)
object 19 (Bentley 18, Erdman 18, Keynes
18) 初期の彩色印刷版。

以下フレイクのプレート画像はブレイク・
アーカイヴによる。



Songs of Innocence and of Experience,
Copy Z, 1826 (Library of Congress) object
18 (Bentley 18, Erdman 18, Keynes 18) 最
晩年の彩色印刷版。

そして愛は神聖な人の姿をとり、
平和とは人間の衣装だから。

だからあらゆる風土のあらゆる人は、
苦悩の内に祈る人は、
神聖な人の姿に祈るのだ、
愛と慈悲、憐れみと平和に。

だからあらゆる人は人間の姿を愛するべきだ。
異教のトルコ人やユダヤ人であっても。
慈悲、愛、そして憐れみが住まう所には、
そこには神もまた住み給うのだ。

この詩は人が神聖なイメージに対して祈ることを主題にしている。この詩の宗旨宗派については最後に「トルコ人もユダヤ人も」とあるだけで明記していないが、基本的にはキリスト教で、スウェーデンボルグの影響があるともいわれている。ブレイクはピカディリーのセント・ジェームズ教会で洗礼を受けているが両親ともディセンター（非国教会系プロテスタント）信徒だったといわれている。母親はブレイクの父と出会う前に結婚歴があり、最初の夫が後のメソジストに影響を与えるモラヴィア教会（Moravian Church）のメンバーだったので、ブレイクの詩にはモラヴィア教徒の聖歌の響きが聞こえるという意見もある。この夫の死後、ブレイクの母はモラヴィア教会を去り亡き夫と同業者の一人であったブレイクの父と結婚した。ディセンターでも国教会の教会で洗礼を受けることができたということだろうか。

ブレイクが洗礼を受けた当時のセント・ジェームズ教会は、哲学者として有名なサミュエル・クラーク（Samuel Clarke, 1675-1729）が亡くなるまで司祭を務めた暫く後で、ブレイクの同時代のカリカチュア作家ジェームズ・ギルレイ（James Gilray, 1756 or 1757~1815）が後に埋葬され、さらに20世紀には詩人のロバート・グレイヴズ（Robert Graves, 1895~1985）が1918年に結婚式を挙げており、古くから現代に至り由緒正しい国教会の教区教会だといえる。この後、1780年の反カトリックのゴードン暴動（Gordon Riots）にブレイクも参加したとの説もあるが、伝説の域を越

えていない。

彼がキャサリン (Catherine Boucher, 1762-1831) と結婚したのは1782年で、当時居住していた地区のバタスィーにあるセント・メアリ教会 (St. Mary in Battersea)⁴ に記録が残っているようである。別の女性に振られたことを打ち明けて、彼女に同情されての結婚だったことは伝説的によく知られているが、この教会も千年以上の歴史がある、由緒正しい国教会の教会だが、これをもってブレイクが国教会信徒だったと断定はできない。

この後1780年代の後半にブレイクはスウェーデンボルグ教会にかかわり、1789年4月14日にロンドンのイースト・エンド、現在のキャノン・ストリート近くの、当時のメイドンヘッド・レインに礼拝堂があったスウェーデンボルグアン・ニュー・ジェルーサレム教会の第一回協議会 (The First General Conference) に妻とともに出席した記録が残っているという。ブレイクの周辺の同業者にはスウェーデンボルグに関心のある人が多く、ブレイク自身も既存の教会に飽き足らず、宗教的にフランス革命の時代に即した急進思想を求めていたと思われる。しかし彼が間もなく創作する『天国と地獄の結婚』(The Marriage of Heaven and Hell, 1790-3) はスウェーデンボルグ自身の『天国と地獄』の痛切な風刺で、ブレイクがほどなくスウェーデンボルグから離れていったことが分かる。

この後、ブレイクが宗教組織とかかわった記録は皆無で、没後は当時デイセンターの墓地として知られていた、バンヒル・フィールズに葬られるのである。この墓地にはすでに彼の両親が葬られていて、ブレイク自身が生前この墓地に埋葬されることを望んだともいう。現代ではダニエル・デフォーの立派なオベリスクの隣に彼のつつましい石板の墓碑があるが、これとすでにブレイクの偉大さが認められていた没後百年記念として1927年に設置されたもので、彼の実際の埋葬場所は今や推定されているだけである。同じように共同墓地に投げ込むに等しい埋葬をされたモーツァルトとは異なり、彼は生前も没後も全くの無名であった。

ラファエル前派により発掘されるまで、生前、没後ともほとんど無名だったブレイクが、19世紀末から注目を浴び、20世紀に大ブレイクしたのは、彼の考え方が現代を先取りしていたからともいえる。ブレイクの時代は審

4 バタスィー聖メアリ教会の公式HP : <http://www.stmarysbattersea.org.uk/> https://en.wikipedia.org/wiki/St_Mary%27s_Church,_Battersea

ブレイクの名詩再読

査法 (the Test Act) が有効で1828年まではイギリス国教会以外のディセンターやカトリックの信者が公職、つまり国会議員や公務員から排除されていた。そのような中でこの詩は、キリスト教だけでない、ユダヤ教やイスラム教にも寛容の姿勢を見せている。これは20世紀に大きく進む宗教多元主義の先取りといえるのではないだろうか。それがここでとりあげた「神聖なる姿」「Divine Image」に見られるといいいのではないだろうか。



ロンドン、パンヒル・フィールズのデフォー・メモリアルと右手にブレイクの石板。

This file is licensed under the Creative Commons Attribution-Share Alike 2.0 Generic license.

Attribution: Dr Neil Clifton

冒頭には「慈悲」、「憐れみ」、「平和」そして「愛」が登場するが、これらは決してアレゴリーでも擬人化でもなく、抽象概念で、苦悩の内にある人々はこれらに対して祈りをささげ、またその美徳の概念に感謝の思いをお返しするというのである。これらの抽象概念こそ父なる神であり、また神の子たる人間であり、神の気懸りの人間だというのである。この発想の基本はキリスト教で、神の子の人間というのはアダムを意味し、キリストをも意味し、人間一般をも意味すると取れる。慈悲、憐れみ、愛、平和は人間の属性であり、神聖な人の各部でもあり、それは同時に愛する神の属性である。ゆえにどの宗教においても苦悩の内にある人は神聖な人の姿に、つまり「愛と慈悲、憐れみと平和に」祈るのである。だから「異教のトル

コ人やユダヤ人でも」神聖な人の姿を愛し、祈るべきである。慈悲、憐れみ、愛がある所には神聖な人の姿をした「神」がいるというのである。

この最後のスタンザの「だからあらゆる人は人間の姿を愛するべきだ。/ 異教のトルコ人やユダヤ人であっても。」という箇所は Andrew Lincoln⁵ はじめ多くの研究者が指摘するように、英国18世紀初頭のディセンター系讃美歌作者としてよく知られているアイザック・ワッツ (Isaac Watts, 1674-1748) が子供向けに書いた『聖歌集』(“Divine Songs”)の中の「福音の賞賛」(‘Praise for the Gospel’)を強く意識して、述べた部分といえる。ワッツの詩はブレイクと同じく4クオトレイン quatrainで短いのので全文を引用する:

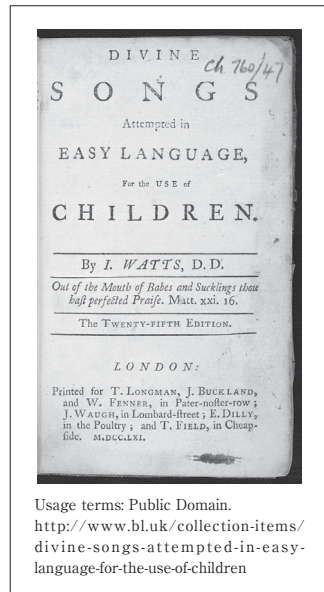
Song 6. Praise for the Gospel

1 Lord, I ascribe it to thy grace,
And not to chance as others do,
That I was born of Christian race,
And not a Heathen, or a Jew.

2 What would the ancient Jewish kings,
And Jewish prophets once have given,
Could they have heard these glorious things,
Which Christ reveal'd, and brought from heav'n!

3 How glad the Heathens would have been,
That worship idols, wood, and stone,

5 Andrew Lincoln (ed.) *Songs of Innocence and of Experience* (London: The William Blake Trust and Tate Gallery, 1991), 159. ちなみに Dr A. Lincoln は著者の嘗ての Host Faculty で現 Queen Mary College, Univ. of London の教授。



If they the book of God had seen,
Or Jesus and his gospel known!

4 Then if the Gospel I refuse,
How shall I e'er lift up mine eyes?
For all the Gentiles and the Jews
Against me will in judgment rise.⁶

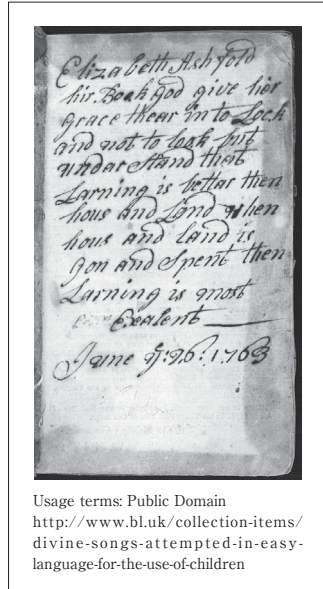
第6歌 福音の賞賛

1 主よ、あなたの恩寵のおかげとします、
そして他の人のように偶然には帰しません、
私がキリスト教徒に生まれ、
異教徒でも、ユダヤ人でもないことを。

2 古代ユダヤの国王たち、
そしてユダヤの預言者たちは何を与えたことでしょう、
彼らがこれらの神々しいことを聞いていたなら、
キリストが啓示し天からもたらしたことを聞いていたなら。

3 異教徒たちはなんと喜んだことでしょう、
偶像、木や石を崇拝する異教徒たちは、
もし彼らが神の書を見て、
イエスとその福音を知っていたなら。

4 だから仮に私が福音を退けるとしたら、
どうしてまなざしを上げることができましょう。
なぜならあらゆる異教徒やユダヤ人が



Usage terms: Public Domain
<http://www.bl.uk/collection-items/divine-songs-attempted-in-easy-language-for-the-use-of-children>

6 Source: Isaac Watts, *Divine Songs: Attempted in the Easy Language of Children* 1715. <http://www.gutenberg.org/files/13439/13439.txt>
See more at: <http://www.bl.uk/collection-items/divine-songs-attempted-in-easy-language-for-the-use-of-children#sthash.4Frj1JxN.dpuf>

審判の日に私に向かって立ち上がるでしょうから。

掲載した画像はブリッティッシュ・ライブラリーが所蔵するワッツの『聖歌集』(“Divine Songs”)のタイトル・ページで、この一冊には表紙の裏に当時まだ幼かったとみられるエリザベス・アッシュフォールドの名前を明記した不完全な英語の書き込みがある。

Elizabeth Ashfold

hir Book god give her grace thear in to Lock and not to look but undarstand that Larning is bettar then hous and Land when hous and Land is gon and Spent then Larning is most Exalent.

June the 26 1763.

ブリッティッシュ・ライブラリーのサイトには書き直した英文が記載されている。

[Elizabeth Ashfold's book – God give her grace to look in it, but not just to look in it, but to understand that learning is better than house and land: when house and land are gone and spent, then learning is most excellent]

(エリザベス・アッシュフォールドの本——神様彼女にこれをのぞき込むたしなみをお恵みください。ただ、ちょっとのぞき込むだけではなく、学識が家や土地よりも価値のあるものだとして理解するために、家や土地がなくなったり処分されても、学識は最高に秀でたものとして残るのです。〈論者訳〉)

これはエリザベスという女兒自らの書き込みとも、彼女にこの本をプレゼントした人の書き込みともとれる。いずれにせよこの書物がこのように英語を書くことが不自由な人にも普及して、教育的役割を果たしていたことがわかる。ワッツの讚美歌は今日に至り広くわが国にも及んでいるが、彼のこの『聖歌集』(Divine Songs)も当時最も人気のあった児童書の一つで、この後19世紀の半ばまで広く英国の家庭で読まれたという。

18世紀の始めは宗派的に排斥されていたディセンターのワッツ自身が、この詩に顕れているように異教徒に対して排他的であった。ブレイクの時

代になお、国教会以外の信者を公職から排除する宗派的差別が強く存在したが、ブレイクは宗教上の寛容主義から現代の多元主義に似た発想を抱いているといえよう。まさにブレイクは20世紀を先取りし、21世紀の現代になお足りない思想をすでに表明していたといえる。

一方松島正一氏は「神聖なる姿」(「神の姿」)“The Divine Image”の13-15行に「聖金曜日の祈り」を指摘している。⁷ これは聖公会(イギリス国教会)の『祈祷書』(*The Book of Common Prayer*)の中の祈祷文のことだが、*The Proposed Book of Common Prayer* (1689)によると“Collects, Epistles and Gospels”の項に次の祈祷がある:

O MERCIFUL God, who hast made all men, and hatest nothing that thou hast made, . . . Have mercy upon all Jews, Turks, Infidels, and Heretics: make known thy blessed Gospel unto them, take from them all ignorance, hardness of heart, and contempt of thy Word: work such a lively faith in them that they may be brought home to thy flock and there be made one fold under one shepherd, Jesus Christ our Lord. Amen.⁸

ああ慈悲深き神様。あらゆる人を造り、造ったものをどれも嫌わず、……。あらゆるユダヤ人、トルコ人、異教徒、異端者にも憐れみを垂れたまえ。あなたのためたき福音書を彼らに知らせたまえ。彼らの無知、心の頑なさ、あなたの言葉への侮りを除き給え。彼らに生きた信仰を引き起こさせ、主なる羊飼イエス・キリストの元あなたの会衆に導かれ、会衆に加わりますように。(論者訳)

ブレイクの「神聖なる姿」の言葉はこの祈祷文やワッツの聖歌を受けての反応ととれる。しかしブレイクの言葉こそがまさに現21世紀に至り生きている。この祈祷文やワッツの聖歌は18世紀以前の発想で、ユダヤ人やトルコ人を異教徒として排し、異端を排斥し、自分たちの宗教や宗派へと導こうとするものである。しかしこのような宗教的独善が狂気につながること

7 松島正一『対訳ブレイク詩集』52n.

8 出典: *The Book of Common Prayer* http://justus.anglican.org/resources/bcp/1689/Readings_1689.htm

を我々は20世紀までに十分経験してきた。しかるにイスラムの狂的な過激思想が現代の国際社会の最大の問題となっている。このような昨今、ブレイクの言葉に耳を傾け、宗教上の寛容主義から20世紀に進んだ宗教多元主義が21世紀に理解され普及するなら、各宗教の原理主義的、排他的急進思想は弱体化するに違いない。

Ⅲ 「無垢の予兆」 (“Auguries of Innocence”)

次にブレイクの有名な草稿詩、「無垢の予兆」を再考したい。この詩は冒頭の4行が有名で、すでに本紀要第117号(2009年)99~103で詳しく論じた。しかしながらこの詩が全体として論じられることは少なく、ここではこの面から再考してみようと思う。

「無垢の予兆」は「ピカリング草稿詩集」(Pickering Manuscript Poems)と呼ばれるグループの詩の中に含まれており、1800年頃から1804年の、ブレイクが唯一ロンドンを離れた、サセックスのフェルファム(Felpham)滞在期に書かれたものも含まれていると思われる。ブレイクはこれらの詩の一部を含むバラッド集出版を検討した時期もあったが、1805年に至りこの計画を放棄した。彼の生前には彩色印刷の作品になることも活字の印刷になることもなく、原稿が残された。彼の死後、19世紀後半からこれらの詩は印刷版の書物に編集されてきたが、ブレイク・アーカイヴには2011年暮れに至り草稿のファクシミリと活字転写の電子版が公表された。⁹

ブレイク・アーカイヴに公表するに当たっての記事によると「ピカリング草稿」という名称は19世紀の所有者の名に因^{ちな}んでおり、10編の詩が22ページの草稿に書かれ、そのうち7編は他に出所がなく、この原稿がオリジナルとみられる。「メアリ」ほか三つの詩(“Mary,” “The Grey Monk,” “The Golden Net”)は他の原稿から転写されたようだが、現存の草稿は最終的段階にあり、明瞭でフォーマルな手書きの文字が、整然と画一的に配列され、変更が少ない点、また詩の数が10編という特徴から、詩集として出版しようとの限定的な目的が推測されている。しかしタイトル・ページや口絵、挿絵などのデザイン等、ブレイクの意思をはっきり示す証拠はない。もち

9 <http://www.blakearchive.org/blake/public/update-2011-12-15.html>

ろん生前発表されることはなく、死後は妻が保管した後、Pickeringという人物が入手した1866年に出版された。

同じくアーカイヴ公表時の記事によると、この草稿詩集はバラッド様式の詩が多いことから「バラッズ草稿」(“Ballads Manuscript”)とか、有名な「無垢の予兆」が含まれていることから「予兆草稿」(“Auguries Manuscript”)とか呼ばれることもあったが、すべての詩が初期作品の先駆的性格が強く、特徴ある主題や観念、傾向がみられ、韻律や繰り返しなどの特徴もバラッドや聖歌の構造をとり、警句、諺の才も如何なく発揮し、物語の構造を風刺と混交しているという。すなわち、この「ピカリング草稿」は『無心の歌、経験の歌』の、特に「無垢の予兆」には『天国と地獄の結婚』の「地獄の格言」と同種の特徴が見いだされるのである。また「精神の戦い」を宣言するブレイクが辿る行方つまり「精神の旅人」の進む将来の世界とは、ここで仄めかされた「神話」の拡張された空間といえる。

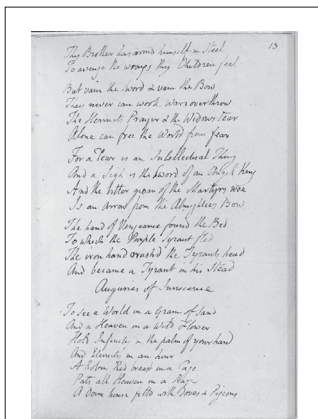
以上の草稿全体の概観の上で、連続の警句集、あるいは格言集といえる「無垢の予兆」を以下で詳しく考察したい。¹⁰

Auguries of Innocence *MS13; Erdman 490*

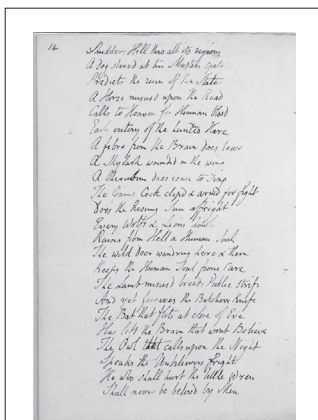
To see a World in a Grain of Sand
 And a Heaven in a Wild Flower
 Hold Infinity in the palm of your hand
 And Eternity in an hour
 A Robin Red breast in a Cage 5
 Puts all Heaven in a Rage
 A Dove house filld with doves & Pigeons
 Shudders Hell thro all its regions *MS14*
 A dog starvd at his Masters Gate
 Predicts the ruin of the State 10
 A Horse misusd upon the Road
Calls to Heaven for Human blood

10 テキストはブレイク・アーカイヴのDavid Erdman
The Complete Poetry and Prose of William Blake, 490-3 による。

Each outcry of the hunted Hare
 A fibre from the Brain does tear
 A Skylark wounded in the wing 15
 A Cherubim does cease to sing
 The Game Cock clird & armd for fight
 Does the Rising Sun affright
 Every Wolfs & Lions howl
 Raises from Hell a Human Soul 20
 The wild deer wandring here & there
 Keeps the Human Soul from Care
 The Lamb misud breeds Public strife
 And yet forgives the Butchers Knife
 The Bat that flits at close of Eve 25
 Has left the Brain that wont Believe
 The Owl that calls upon the Night
 Speaks the Unbelievers fright
 He who shall hurt the little Wren
 Shall never be belovd by Men 30
MS15
 He who the Ox to wrath has movd
 Shall never be by Woman lov'd
 The wanton Boy that kills the Fly
 Shall feel the Spiders enmity
 He who torments the Chafers sprite 35
 Weaves a Bower in endless Night
 The Catterpillar on the Leaf
 Repeats to thee thy Mothers grief
 Kill not the Moth nor Butterfly
 For the Last judgment draweth nigh 40
 He who shall train the Horse to War
 Shall never pass the Polar Bar
 The Beggars Dog & Widows Cat
 Feed them & thou wilt grow fat

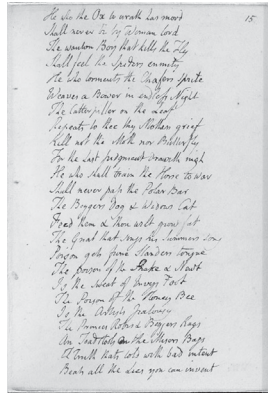


The Pickering Manuscript, c. 1807
 (Morgan Library and Museum) object
 13 (Bentley 126.13) "Auguries of
 Innocence" ll. 1-7 (下部8行)

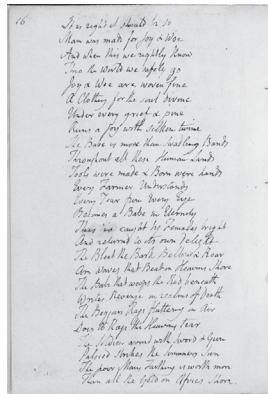


The Pickering Manuscript, object
 14 (Bentley 126.14) "Auguries of
 Innocence" ll. 8-30

The Gnat that sings his Summers song 45
 Poison gets from Slanders tongue
 The poison of the Snake & Newt
 Is the sweat of Envys Foot
 The Poison of the Honey Bee
 Is the Artists jealousy 50
 The Princes Robes & Beggars Rags
 Are Toadstools on the Misers Bags
 A truth thats told with bad intent
 Beats all the Lies you can invent
 It is right it should be so 55 MS16
 Man was made for Joy & Woe
 And when this we rightly know
 Thro the World we safely go
 Joy & Woe are woven fine
 A Clothing for the soul divine 60
 Under every grief & pine
 Runs a joy with silken twine
 The Babe is more than swaddling Bands
 Throughout all these Human Lands
 Tools were made & Born were hands 65
 Every Farmer Understands
 Every Tear from Every Eye
 Becomes a Babe in Eternity
 This is caught by Females bright
 And returnd to its own delight 70
 The Bleat the Bark Bellow & Roar
 Are Waves that Beat on Heavens Shore
 The Babe that weeps the Rod beneath
 Writes Revenge in realms of death
 The Beggars Rags fluttering in Air 75
 Does to Rags the Heavens tear
 The Soldier armd with Sword & Gun



The Pickering Manuscript, object 15 (Bentley 126.15) "Auguries of Innocence" ll. 31-54



The Pickering Manuscript, object 16 (Bentley 126.16) "Auguries of Innocence" ll. 55-80

Palsied strikes the Summers Sun
 The poor Mans Farthing is worth more
 Than all the Gold on Africs Shore. 80

[Begin Page 492] MS 17

One Mite wrung from the Labrers hands
 Shall buy & sell the Misers Lands

Or if protected from on high

Does that whole Nation sell & buy

He who mocks the Infants Faith 85

Shall be mock'd in Age & Death

He who shall teach the Child to Doubt

The rotting Grave shall neer get out

He who respects the Infants faith

Triumphs over Hell & Death 90

The Childs Toys & the Old Mans Reasons

Are the Fruits of the Two seasons

The Questioner who sits so sly

Shall never know how to Reply

He who replies to words of Doubt 95

Doth put the Light of Knowledge out

The Strongest Poison ever known

Came from Caesars Laurel Crown

Nought can Deform the Human Race

Like to the Armour's iron brace 100

When Gold & Gems adorn the Plow

To peaceful Arts shall Envy Bow

A Riddle or the Crickets Cry

Is to Doubt a fit Reply

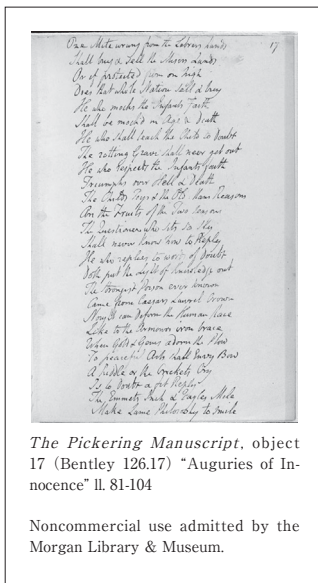
The Emmets Inch & Eagles Mile 105

Make Lame Philosophy to smile

He who Doubts from what he sees MS 18

Will neer Believe do what you Please

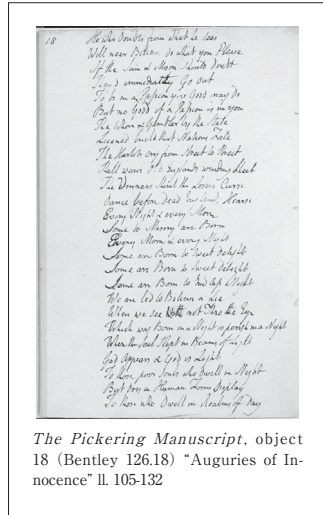
If the Sun & Moon should Doubt



The Pickering Manuscript, object 17 (Bentley 126.17) "Auguries of Innocence" ll. 81-104

Noncommercial use admitted by the Morgan Library & Museum.

Theyd immediately Go out 110
 To be in a Passion you Good may Do
 But no Good if a Passion is in you
 The Whore & Gambler by the State
 Licencd build that Nations Fate
 The Harlots cry from Street to Street 115
 Shall weave Old Englands winding Sheet
 The Winners Shout the Losers Curse
 Dance before dead Englands Hearse
 Every Night & every Morn
 Some to Misery are Born 120
 Every Morn & every Night
 Some are Born to sweet delight
 Some are Born to sweet delight
 Some are Born to Endless Night
 We are led to Believe a Lie 125
 When we see not Thro the Eye
 Which was Born in a Night to perish in a Night
 When the Soul Slept in Beams of Light
 God Appears & God is Light
 To those poor Souls who dwell in Night 130
 But does a Human Form Display
 To those who Dwell in Realms of day



The Pickering Manuscript, object 18 (Bentley 126.18) "Auguries of Innocence" ll. 105-132

有名な冒頭4行の後は、2行ないし4行ごとの、各行8音節の韻文で構成された警句の羅列である。カプレット (couplet: 2行連) によるアフォリズム (aphorism: 警句、格言) 集と断定する意見もあるが、一部4行ないし3行以上のまとまりが推測されるところもある。ブレイクによくあるように句読点が不完全で曖昧な表現が多いが、以下拙訳を提示する。諺のまとまりごとに検討する必要があるので、原詩の複数行を1行中にまとめることもして、まとまりごとに原詩の行数を示す。

無垢の子兆

一粒の砂に世界を見 / 野の花に天国を見るため /
捉えよ、手のひらに無限を / そして一時間に永遠を。(1-4)
籠の中のムネアカコマドリは / 天国全体を怒りの内に置く。
野バトと家バトを満たした鳩小屋は / 地獄の全地域を慄かせる。(5-8)
主人の家の門口で飢える犬は / その国家の崩壊を予言する。
路上で虐待された馬は / 人間の血を求めて天に訴えかける。(9-12)
狩りをされた野ウサギの各々の叫びは / 脳から延びる神経繊維を引き裂く。
ヒバリが翼に傷を負うと / ケルビームも歌うことをやめる。(13-16)
闘鶏が闘いのため羽を切り詰められ、武装すると / 昇りゆく太陽は恐れる。
あらゆるオオカミやライオンの吼え声は /
人間の魂を地獄から奮い立たせる。(17-20)
あちこちさまよう野生のシカは / 人間の魂を心労から遠ざける。
虐待された子羊は公衆の不和を引き起こすが /
それでもなお、屠殺者の包丁を許す。(21-24)
宵の終わりに飛び交うコウモリは / 決して信じない脳から去ったばかり。
夜に訪れるフクロウは / 不信心者の恐怖を語る。(25-28)
小さいミソサザイを傷つける男は、 / 人間に愛されることはない。
雄牛を怒らせる男は / 女に愛されることは決してない。(29-32)
ハエを殺す無慈悲な少年は / クモの敵意を感じるだろう。
コガネムシの魂を苦しめる者は、 /
果てしない夜の住処^{すみか}を組み立てる。(33-36)
木の葉の上の毛虫は / 汝の母親の悲嘆を汝に繰り返させる。
殺すことなかれ、蛾も蝶も、 /
何となれば最後の審判が近づいているから。(37-40)
馬を戦のために鍛える者は / 極地の障壁を越すことは決してない。
乞食の犬、寡婦^{おふ}の猫に / えさを与えるなら、汝は太るだろう。(41-44)
夏の歌を歌う蚋^はは / 悪口の舌から毒を得る。
蛇やイモリの毒は / 嫉妬^{ほろ}の足から出た汗だ。
蜜蜂の毒は / 芸術家の嫉妬だ。(45-50)
王侯の礼服と乞食の檻^{ぼろ}褌は /

吝嗇家の財布に生えた毒キノコ（トードストゥール）だ。¹¹ (49-52)
悪意を持って語った真実は / 思いつく全ての嘘を凌駕する。
正しくその通りにちがいない、 /
人間が喜びと悲しみのために作られたということは。
このことを正しく知った時に /
我々は世の中を安全に進むことができるのだ。(53-58)
喜びと悲しみは高貴に織られた / 神聖な魂のための衣装だ。(59-60)
あらゆる悲嘆と嘆きの下には / 絹の撚糸の喜びが走っている。(61-2)
赤子は襁褓紐^{むつき}以上の存在である、 / この人間の国全てを通じ。(63-4)
道具は作られたもの、人の手は生まれたものと /
あらゆる農民は理解している。(65-6)
あらゆる目からのあらゆる涙は / 永遠界において赤子になる。
これは輝かしき女性たちによって捉えられ /
それ自体の喜びに戻される。(67-70)
羊の鳴き声、狐の吼え声、雄牛の唸り声、ライオンの怒鳴り声は
天国の海岸に打ち寄せる波である。(71-72)
鞭の下で泣く赤子は / 死の領域で復讐を記録する。(73-74)
空中に翻る乞食の檻褸^{ぼろ}は / 天を引き裂いて檻褸にする。(75-6)
剣と銃で武装した兵士は / 夏の太陽を一撃し麻痺状態にする。(77-8)
貧民のファージンゲ¹² は /
アフリカの海岸すべての黄金より価値がある。(79-80)
労働者の手から搾り取られた1マイト¹³ は /
吝嗇家の土地の売り買いさえできるだろう。
あるいは、高い所から（天国から）守られるなら /
国全体の売り買いさえできる。(81-84)
幼子の信念を嘲るものは / 老齢と死に際して嘲られるだろう。
子供に疑うことを教えようとする者は /
腐った墓から決して出られないだろう。(85-88)
幼子の信念を尊ぶものは / 地獄と死に打ち勝つ。

11 toadstool : からかさ状の毒キノコ。

12 farthing : 小銅貨、1/4 ペニー；マルコによる福音書12章41-44参照。

13 mite: 半ファージンゲ（1/2 farthing）；少額の金）。

子供の玩具と老人の理屈は / 二つの季節の果実である。(89-92)
ずる賢く座っている質問者は / 答え方を知ることは決してない。¹⁴
疑いの言葉に答える者は / 知識の光を消し去る。(93-96)
これまで知られた最強の毒は / シーザーの月桂樹の王冠に由来する。
何ものも人類を損なうことはできない / 鉄の鎧の留金のように。(97-100)
黄金と宝石が鋤を飾る時 / 嫉妬は平和な芸術に屈服するだろう。
なぞなぞか、コオロギの鳴き声が /
疑惑に対しては相応しい答えだ。¹⁵ (101-104)
アリのインチ、ワシのマイルが / 不具の哲学を微笑みにする。
見えるものを疑う人は、 / 何に喜ぼうとも決して信じない。(105-108)
仮に太陽や月が疑うことをするならば、 /
それらは直ちになくなるだろう。(109-110)
激情の中にいるならば、うまくいくだろうが、 /
激情が内部にあるならうまくいかないだろう。
娼婦と賭博師が国により /
許可を受けたら、国家の破滅の命運が決まる。(111-114)
遊女の叫びは、通りから通りへと、 /
古いイングランドのはためく経かたびらを織りなすだろう。
勝者は叫び、敗者は呪う。 /
死んだイングランドの霊柩車の前で踊れ。(115-118)
夜ごと、朝ごとに / 誰かが困窮の中に生まれる。
朝ごと、夜ごとに / 誰かが甘美な喜びの中に生まれる。(119-122)
誰かは甘美な喜びの中に生まれるが、 / 誰かは果てしなき夜に生まれる。
我々は嘘を信じるように導かれる、 / 目を通して見ることをしないときに。
夜に生まれ、夜に消滅するそれを。(123-128)
魂が光の輝きの中で眠ったときに、 / 神が現れる。神は光である、
夜に住む哀れな魂たちにとって。
しかし神は人間の姿を示し出す /
昼間の領域に住む人々に対して。(129-132)

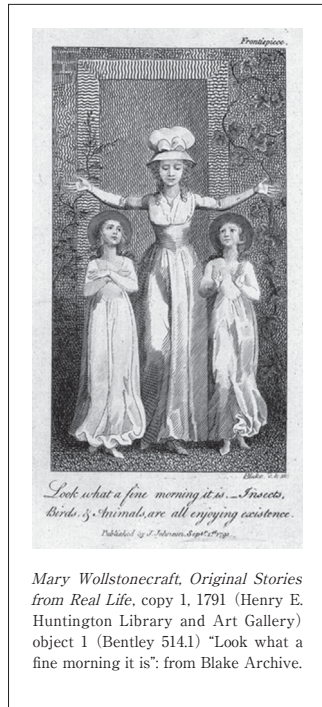
14 Felpham 在住時代の John Scofield 事件の裁判とかかわりがあるかと見られる。

15 『マクベス』II-2

ことわざ、格言といえ、ブレイクは『天国と地獄の結婚』の中に「地獄の格言集」(“Proverbs of Hell”)を組み込んでいる。「地獄のことわざ」と言うからには、逆説や風刺、皮肉が多いかと連想されるが、意外と素朴で明瞭な普通の格言が並んでいるといえる。一方この「無垢の予兆」においては、冒頭の有名な4行からして意味が曖昧で様々な解釈の可能性がでてくる。これは「無垢の予兆」がアフォリズム集とはいえ、詩の形で書かれており、純粹に詩のジャンルに入る作品で韻律があり、またブレイクの詩に特徴の意味の曖昧さ、多様性に満ちているからである。また悪く言うと、ブレイクは詩を造るために取って文法を曲げることを厭わないし、スペリングは正書法とは異なり、パンクチュエーション(句読法)に至っては無頓着としか言いようがない。

IV 「メアリ」の実像

次に同じく「ピカリング草稿詩集」に収められている「メアリ」を検討したい。「メアリ」という名前は当然聖母マリアに根差している。英語圏では“Mary”ないしは“Maria”が、おそらく最も多い女性名であろう。従ってここで取り扱うブレイクの「メアリ」も誰のことを述べているか簡単には断言できないが、一般的にはブレイクの個人的知り合いでもあったメアリ・ウルストンクラフト(Mary Wollstonecraft 1759- 1797)のことで推定されている。彼女は20世紀の女性解放運動の元祖のような存在で、その『女性の権利の擁護』(*A Vindication of the Rights of Woman*, 1792)は現代につながる源泉としてのこの時代の名著の一つである。1790年代の急進派出版者ジョゼフ・ジョンソンなどを通じてブレイクが彼女の著書の挿絵を担当しており、おそらく直接接触する機会も



あったと思われる。彼らが職業上つながりのあったとみられる、代表的な例が1791年の『オリジナル・ストーリーズ』(*Original Stories from Real Life*)で、ブレイクの銅版画になる6枚の挿絵が挿入されている。ブレイクがこの詩「メアリ」を書いたのはウルストンクラフトが波乱万丈の38年の生涯を終えた1797年から5年ほど後のことで、特にその末尾が1797年頃ジョン・オーピーの描いた彼女の最後の肖像画の特徴をよくとらえているという。¹⁶ そこで画像を提示してブレイクの表現と充分に対照してみようと思う。以下詩の原文と草稿の画像、さらにオーピーの肖像画と「メアリ」の拙訳を提示する:

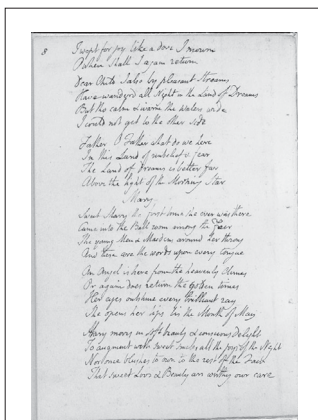
Mary

MS 8 下半分

Sweet Mary the first time she ever was there
 Came into the Ball room among the Fair
 The young Men & Maidens around her
 throng
 And these are the words upon every
 tongue

An Angel is here from the heavenly
 climes 5
 Or again does return the Golden times
 Her eyes outshine every brilliant ray
 She opens her lips tis the Month of May

Mary moves in soft beauty & conscious
 delight
 To augment with sweet smiles all the
 joys of the Night 10



The Pickering Manuscript, object 8
 (Bentley 126.8) "Mary", ll. 1-12.
 (草稿8ページ下半分)

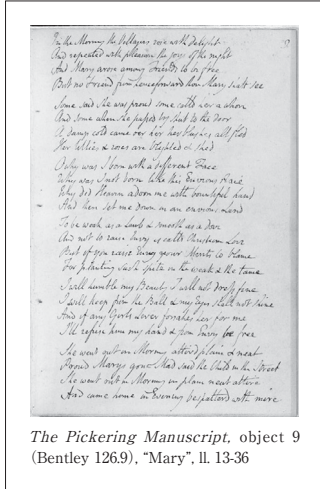
16 松島正一『ブレイク論集－『ピカリング稿本』『ミルトン』その他』(英光社、2010)、123.

Nor once blushes to own to the rest of the Fair
That sweet Love & Beauty are worthy our care

MS 9

9 In the Morning the Villagers rose with delight
And repeated with pleasure the joys of the night
And Mary arose among Friends to be
free 15
But no Friend from henceforward thou
Mary shalt see

Some said she was proud some calld her
a whore
And Some when she passed by shut to
the door
A damp cold came oer her blushes all
fled
Her lillies & roses are blighted & shed
20



O why was I born with a different Face
Why was I not born like this ¶Envious ¶Race
Why did Heaven adorn me with bountiful hand
And then set me down in an envious Land

To be weak as a Lamb & smooth as a dove 25
And not to raise Envy is calld Christian Love
But if you raise Envy your Merits to blame
For planting such spite in the weak & the tame

I will humble my Beauty I will not dress fine
I will keep from the Ball & my Eyes shall not shine 30
And if any Girls Lover forsakes her for me

I'll refuse him my hand & from Envy be free

She went out in Morning attird plain & neat
Proud Marys gone Mad said the Child in the Street
She went out in Morning in plain neat attire 35
And came home in Evening bespatterd with mire

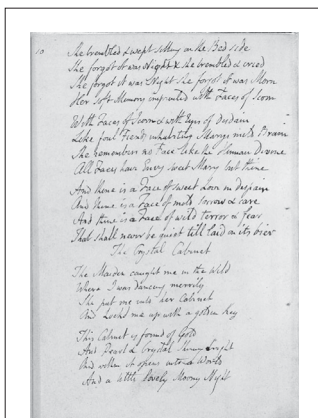
MS 10 上半分

10 She trembled & wept sitting on the Bed side
She forgot it was Night & she trembled & cried
She forgot it was Night she forgot it was
Morn
Her soft Memory imprinted with Faces of
Scorn 40

With Faces of Scorn & with Eyes of
disdain
Like foul Fiends inhabiting Marys mild
Brain
She remembers no Face like the Human
Divine
All Faces have Envy sweet Mary but
thine

And thine is a Face of sweet Love in
Despair 45
And thine is a Face of mild sorrow & care
And thine is a Face of wild terror & fear
That shall never be quiet till laid on its bier

21, 22 Cp. the lines in Blake's letter to Butts, dated Aug. 16, 1803:
O why was I born with a different face?
Why was I not born like the rest of my race?



The Pickering Manuscript, object 10
(Bentley 126.10), "Mary", ll. 37-48.
(草稿10ページ上半分)

Noncommercial use admitted by the
Morgan Library & Museum

メアリ

美しいメアリは初めてそこにやって来た、
その舞踏場の美しい人々の間にやって来た。
すると若い男性や乙女たちが彼女の周りに集まり
全ての人の口に次のような言葉がのぼった。

天使がここに天国からまいおりた。 5
あるいは黄金時代の再来か。
彼女の眼はあらゆる輝かしい光線に勝る光を放ち、
彼女が唇を開くとまさに五月のようだ。

メアリは柔らかな美と意識した喜びの内に動く、
美しい微笑みを浮かべて夜の喜び全てを増し。 10
他の美女たちに対して一度ならず赤面し、
甘美な愛と美が注意に値するものとの主張した。

朝になると村人たちは嬉しそうに起き上がった、
そして昨夜の歓楽のことを楽しく繰り返し述べた。
するとメアリも起き上がり、友人たちの間で自由になろうとした。 15
しかしこれから先、汝メアリはいかなる味方に会うこともないだろう。

ある者は彼女が高慢だといい、ある者は彼女を淫婦と呼んだ。
またある者は彼女が通りかかると戸口を閉ざした。
意気を消沈させる冷たさがやってきて彼女のバラ色の顔色はすっかり失せた、
彼女のユリやバラの顔色は枯れて失われた。 20

ああ、なぜ私は異なった顔をもって生まれたのか。
なぜ私はこの嫉妬深い人々のように生まれなかったのか。
なぜ天は慈悲深い手で私を飾り、
嫉妬深い地に私をおろしたのか。

子羊のように弱くあり、鳩のように平静でいて、 25

嫉妬心を起こさないのがキリスト教徒の愛と呼ばれている。
しかし嫉妬心を引き起こすと長所も咎められるようになる、
弱い人々や従順な人々にそのような棘を植え付けたことで。

私は自分の美を卑しめ、綺麗な服は着ない。
私は舞踏会を控え、目を輝かせることをしない。 30
そして、もし誰か少女の恋人が私のために彼女を見捨てても、
私は彼の求婚を拒絶して嫉妬を免れる。

彼女は朝になると質素でさっぱりした服を着て出かけた。
高慢なメアリは気が狂った、と通りで子供が言った。
彼女は朝に質素でさっぱりした服を着て出かけた。 35
そして夕方には汚辱を浴びせられて帰宅した。


彼女は寝台の端に座り震えて泣いていた。
彼女は夜であることを忘れ、震えて泣いていた。
彼女は夜であることを忘れ、朝であることを忘れた。
彼女の柔和な記憶には嘲りの顔が刻み込まれた。 40

嘲りの顔や侮蔑の目が
悪鬼のように、メアリの柔和な脳に巣くった。
彼女はもはや人間の神聖な顔を全く思い出せなかった。
全ての顔には嫉妬が、麗しのメアリ、あなたを除けば。

あなたの顔は絶望にあっても麗しい愛のそれ。 45
あなたの顔は優しい悲しみと心配のそれ
あなたの顔はひどい恐怖と戦慄のそれ。
それはひつぎに横たわるまではおさまらない。

最後に掲載した肖像画はメアリ・ウルストンクラフトが亡くなる直前の
1797年に描かれた有名なもので、現在はロンドンの「ナショナル・ポート
レイト・ギャラリー」に展示されている。この絵が描かれた当時彼女は38歳、



Mary Wollstonecraft by John Opie oil on canvas, circa 1797
30 1/4 in. x 25 1/4 in. (768 mm x 641 mm) Bequeathed by Jane, Lady Shelley, 1899
Primary Collection NPG 1237 © National Portrait Gallery, London
Supplied with permission to use here as Creative Commons

<http://www.npg.org.uk/collections/search/portrait/mw02603/Mary-Wollstonecraft?LinkID=mp01807&role=sit&rNo=0>

メアリー・ウルストンクラフトの肖像、ジョン・オービー画、1797年。彼女の亡くなる直前で妊娠中であった。ゴドウィンとの間にできた娘メアリーは後にシェリーと結婚し『フランケンシュタイン』等の小説を書いて有名になる。

ウィリアム・ゴドウィンの子を身ごもっていて、彼と教会で式を挙げた前後と思われる。この肖像からも妊娠中であった様子がうかがわれる。ブレイクの「メアリー」が描く状況と比べれば、数冊の書物出版で名声も上げ、最後にゴドウィンと結ばれ、彼女の最も幸福な時期といえる。しかし肖像画の表情は確かに「絶望にあっても美しい愛」、「優しい悲しみと心配」、「ひどい恐怖と戦慄」がうかがわれる一方、満たされた幸福そうな温かさが感じられないでもない。しかしこの暫く後、彼女は出産の直後に亡くなるの

である。よく知られているように、この時生まれた女兒が後に詩人シェリーの二番目の妻になり、『フランケンシュタイン』はじめ多くの小説も書いた作家になるもう一人のメアリである。しかし母親メアリが娘のメア리를育てることはなかった。

おそらくメアリ・ウルストンクラフトの真の幸福はその最後の短い期間だけだったといえよう。

人間、特に女性の解放を主張し、自由恋愛を实践した彼女の一生は壮絶としかいいようがない。

参考文献

Erdman, David (ed.). *The Complete Poetry and Prose of William Blake* rvd ed. New York & c: Anchor, 1982 & c.

Eaves, Morris (ed.). *The Cambridge Companion to William Blake*. Cambridge U. P., 2003.

松島正一. 『対訳ブレイク詩集』岩波文庫、2004.

———. 『ブレイク論集－『ピカリング稿本』『ミルトン』その他』英光社、2010

Blake Archive: <http://www.blakearchive.org/>

以上のほかの文献は拙著『イギリス・ロマン派とフランス革命』桐原書店、2003の13～18ページ参照。

